■　地平を拓く　■

四冠 vs 三冠。今年度の将棋の王将戦は、頂上決戦と言われていた。７番勝負の蓋を開けてみれば、藤井聡太が４連勝。魔王の異名を持つ渡辺明から王将位を奪い、五冠となった。穏やかな物腰からは想像がつかない、強く正確無比な差し回し。異次元の強さに、ファンからは将棋星人と呼ばれている。この先、いくつのタイトルを取るのだろう。

次元を異にする若者は彼だけではない。先週末は、北京冬期五輪にも別次元で競技に挑んだ２人の若者の姿があった。

フィギュアスケートの羽生結弦はフリーの冒頭で、前人未踏のクワッドアクセル(４回転半)に挑んだ。回転が足りずに転倒したが、ISU から公認大会で初めて４回転半を飛んだと認定された。「彼ならできるかも」との世界中の期待に応えた。

飛ばずに３連覇を狙う選択肢もあったはずだ。しかし、それはプライドが許さなかったようだ。「自分の限界に挑みたい」。世界初はそれよりも大きな価値があると彼は信じた。メダルには届かず、新ジャンプは転倒したが、「今までで一番近かった」と清々しかった。

スノーボード男子ハーフパイプ決勝では、平野歩夢がトリプルコーク 1440(縦３回転＋横４回転)の大技をただ１人決めた。予選トップの平野は最終滑走者。２回目の演技は世界最高難度の構成を滑りきったが、得点は伸びず、２位に。解説者も不思議がっていた。

３回目のラストランで、完成度を増して文句なしで逆転の金メダル。もし２回目でトップに立ち、３回目の演技前に優勝が確定していたら、世界初の新技フロントサイド 1620（横４回転半)を見ることができたかも。ちょっと残念だった。

２人を見ていると、新しい日本人を想う。特に平野は半年前まで、東京五輪のスケートボード競技で世界と戦っていた。極めるだけでは物足りないのだろう。未開地を拓く開拓者さながら、未だ誰も成し遂げられないことに敢えて挑んでいる。

藤井もこれまでの棋士を超越しているように思える。相手と駆け引きをして勝つというよりも、盤上における駒の配置から、ただひたすら最善手を探しているように見える。将棋の神様なら一体どう打つだろうかと。

「無極」。藤井の好きな言葉である。極まることがない、頂点がないという意味だ。それぞれの世界で地平を拓く挑戦者たち。メダルやタイトル、誰かと競うことを超えて、人間の限界を楽しんでいるのだろうか。新しい時代を見せてくれる若者たちが眩しくってたまらない。